

言語の記号化*

山下 淑子**

意識の世界に、はじめて光がさし込んで来た頃のことを考えてみよう。半ば暗黒の世界の中に、時折鮮やかな光が横切って行ったのを思い出す。それは、ことばが意識の世界に働きはじめた時であったのだろうか。

水に触れて、はじめて“w-a-t-e-r”という「ことば」を知ったあのヘレンケラー女史の感動的な場面は、人間の持つ「ことば」と意識のつながりということを考える時、非常に象徴的である。

サピア (Edward Sapir) が述べているように、「言語は純粹に人間の」ものである。

“Language is a purely human and non-instinctive method of communicating ideas, and desires by means of a system of voluntarily produced symbols.” (*Language*, p. 8)

人間のみが、対象である事物や事象を言語に転化させて行くシムボリズムの能力を有するのである。

この小論では、シムボリズムのはたらき——言語の記号化 (symbolization) について考えてみたいと思う。

ウエブスター⁽¹⁾によると *symbolization* には、次のような解釈がある。

symbolize: to represent by a symbol or symbols.

symbol: 1. something that stands for or represent another thing; especially, an object used to represent something abstract; emblem: as, the dove is a *symbol* of peace, the cross is the *symbol* of Christianity.⁽¹⁻¹⁾

2. an arbitrary or conventional sign (as a character, a diagram, a letter, or an abbreviation) used in writing or printing relating to a particular field (as mathematics, physics, chemistry, music, or phonetics) to represent operations, quantities, spatial position, valence, direction, elements, relations, qualities, sounds, or other ideas or qualities.⁽¹⁻²⁾

この小論で *symbolize* というのは、*symbol* の 2. の解釈に基づく考え方である。すなわちことばを記号と考え、対象を記号化して行く人間の言語のはたらきを考えてみることになる。

* Symbolization of Language

** Yoshiko Yamashita

2. の定義をもう少し具体的に説明すると次のようになる。

「記号とは、それ自身は物理的な事物、または物理的な出来事である。ガイガー・カウンターの針のふれや、一定の容器の中の水銀柱の高さは、放射線の量や気温の記号である。あるいは、記号とは、人間の発声器官の一定の（しかし民族によって異なる）音声波であり、紙や黒板の上にそれぞれ一定の約束にしたがって配列されているインクや白墨の分子のかたまりであろう。以上のような色々な種類の記号に共通な特徴は、多種多様な事物の状態や、その複雑な変化を比較的単純な他のある物理的変化のヴァリエティーに対応させることによって、直接に事物の状態や変化そのものによらないでも間接にそれらについての情報を与える、ということである⁽²⁾」。

コミュニケーションの中では、記号化はどの段階で行なわれるのであろうか。

まず情報の伝達者の側からみると、

- (1) 伝達の対象は、言語のたくわえの中から選択された記号に置きかえられる。
- (2) それらの記号は、一定の規則に従って結合され、ある単位となる。
- (3) それらの単位は、次々に伝達者の音声器官を経てことばとして表出される。

この(1)から(3)の過程は、通信理論でいう encoding にあたるものである⁽³⁾。

次にこの過程を、被伝達者の側からみると、

- (4) (3)のことば（音声波の記号）は、被伝達者の耳に達し、知覚される。
- (5) 他の情報（たとえば、その時の状況により判断される事柄など）をつけ加え、伝わって来た記号を対象におきかえる。
- (6) 伝達者により伝わって来た事を理解する。

この(4)から(6)の過程は通信理論で decoding にあたるものである。

従って、伝達の対象と記号が結びつく(1)と記号が伝達されてきたことに還元される(5)の段階が、一番記号化に関係があるようである。

パース (Charles Sanders Peirce) の考え方にもとづき、モリス (Charles Morris) を経て⁽⁴⁾現在では広くみとめられている記号論 (semiotics) によると、記号のはたらきには、次の三つの側面がある。すなわち、

- (1) 記号とこれを使用する人間との関係
(これを語用論 (pragmatics) という)
- (2) 記号とそれがさし示す事物や事象との関係 (これを意味論 (semantics) という)
- (3) 一つの記号と他の記号との関係 (これを構文論 (syntactics) という)

である。

記号論の考え方によると、記号化は、(1)(2)に関係があることは明らかであろう。

以上のようなわくづけをしておいて、次にヤコブソン (Roman Jakobson) の、失語症 (Aphasia) と言語のアスペクトに関連した研究をみるのは大変面白いと思う⁽⁵⁾。

ヤコブソンは、失語症の二つのタイプをとりあげて、言語の選択 (selection) と結合

(combination) の二つのはたらきを明らかにしている。

二つのタイプの失語症とは、

- (1) 主な欠陥が、選択能力と置換 (substitution) 能力にあるもの。この場合には、結合 (combination) 能力と文章の構成 (contexture) 能力は、比較的安定している
- (2) 主な欠陥が、(1)とは逆に、結合能力と構成能力にあり、比較的、選択能力と置換能力は残っている場合

である。

(1)のタイプの患者は、会話をはじめるのが困難であり、一つのことばだけを取り出して言うことができない。例えば、“knife”とは言えないが、pencil-sharpener, apple-parer, bread-knife, knife-and-fork といった形 (bound form) でなら言える。しかし、代名詞、代名副詞、連結語、助動詞などを使う能力は残っている。従って、これは、選択が出来ないことを示している。次に置換であるが、例えば、bachelor=unmarried man という様な置換をさせようとしても、出来ない。そのかわり “bachelor” を “I have a good apartment, entrance hall, bedroom, kitchen.” “There are also big apartments, only in the rear live bachelors.” のようなコンテキストの中では使うことが出来る。つまり、いつも “bachelor” ということばが使われるような習慣的な会話の中では、大丈夫なわけである。同様に、しらべる人が、患者にえんぴつを見せて、その名前を言わせようとする時、「えんぴつ」(pencil) というかわりに、“this is [called] a pencil to write” というそうである。また他の患者は、コムパスの絵が示された時、“Yes, it’s a … I know what it belongs to, but I cannot recall the technical expression … yes … direction … to show direction … a magnet points the north.” と答えたという。

ここで、ヤコブソンは、次のように述べている。

“Such patients fail to shift, as Peirce would say, from an index or icon to a corresponding verbal symbol.”⁽⁶⁾

(このような患者は、パーズが言うように、*index* や *icon* をそれに相当する vocal symbol に、変えることが出来ないのである。)

index と *icon* をちょっと説明しておこう。

index: a sign whose specific character is causally dependent on the object to which it refers but independent of an interpretant <a bullet hole in a fence is an index that a shot has been fired> — contrasted with icon and symbol.⁽⁷⁾

icon: a sign (as a straight line on a map) that signifies by virtue of sharing a property with what it represents (as a straight road) — contrasted with index and symbol <a photograph, a star chart, a model, a chemical diagram are icons, while the word photograph the names of the stars and of chemical elements are symbols>.⁽⁸⁾

すなわち、さし示されたものの名前が言えないということは、そのような患者が、index や icon (さし指されたもの) と symbol とが別のものであるということがわからないためである。

ヤコブソンは更に次のように述べている。“The aphasic defect in the ‘capacity of naming’ is properly a loss of metalanguage.”⁽⁹⁾

(失語症患者が、「名前を言う能力」に欠陥があるのは、超越的言語がないからである)。このタイプの失語症の患者にとっては、指し示されている対象 (object) を述べる object language とその対象を記述する、metalanguage との区別がはっきりとしていないのである。

上の例において、《object language》と metalanguage とを明らかにして述べると、

“In the code that we use, the name of the indicated object is 《pencil》”; 或いは “In the code we use, the word 《bachelor》 and the circumlocution 《unmarried man》 are equivalent.”⁽¹⁰⁾

となる。

その他このタイプの患者の特長として、次のような能力の欠陥が指摘されている。

(1) ある語を他の国語に変える能力

(2) 色・大きさ・形によってある対象を分類する能力

(3) metaphor (暗喩) や metonymy (換喩) によらないで、そのものを言い切る能力
従って、(1)により、失語症の患者は多国語を使うことは出来ず、(2)により、色や大きさや形などを家や、オフィス等にある空間的なものと結びつけてしか言えない。(3)により、例えば “black” と言えなくて “What you do for the dead” の様に言ったり、*knife* の代りに *fork*, *pipe* の代りに *smoke* と言ったりするのである。

以上はタイプ(1)の失語症の患者について、どういう能力の欠陥が、どのような結果を生むかを見てきたのであるが、これを裏返してみれば、正常な人が持つシムボリズムの能力とは、どのようなものがわかると思う。

正常な人は、コミュニケーションを行なう時、伝えたいと思う事物や事象を、icon や index に対応する symbol に置きかえ、目的言語とは別の超越的言語であらわすのである。symbol の選択にあたっては、その symbol の使用者の過去の経験、文化的素養などの背景が働きかけ、反応の選択に影響を及ぼすのである。

対象の記号化すなわちシムボリズムの能力によって、人間は抽象的な思考も可能になるのである。これは、言語が思考を規定することであるが、逆に言語によって作られた思考或いは概念が言語を規定する場合も起こってくるのである。「姉」と「妹」、「水」と「湯」のような一語による区別は英語にはなく、日本語では、エスキモー語のように、「降る雪」、「積もった雪」、「とけかかった雪」等をあらわすのに、それぞれ一語を用いることはない。色彩の区別を、英語とウェルズ語で比較してみると、次のような、ずれがあることは、非常に興味深いことである。⁽¹¹⁾

green	gwyrd
blue	glas
gray	llwyd
brown	

ことばの記号化のはたらきが、人間特有のものであり、ことばが思考にどのような作用を及ぼしているかをみるのに、次のような、心理学における動物の実験の例が役立つ。

〔1〕チンパンジーのシンボル行動とその限界

チンパンジーの見ている前で、実験者が室の四隅に一つずつ色のちがった箱をおき、その四つの箱の中の一つに餌を入れる。つぎにチンパンジーを他の室につれていき、数分間待機させたのち実験室へつれもどす。このばあい動物は餌のある箱へ難なく達し、延期反応は容易に成功する。つぎには、おなじ仕組みであるが、チンパンジーが他室で待機中に、餌のはいつている箱（緑色）を他の隅にある他の色の箱と位置を交換する。このばあい、実験室につれもどされたチンパンジーは餌のある緑色の箱（いまは他の隅にある）へ行かず、その箱のもとあった隅に行き、緑色と置きかわった他の箱をいじりまわしてその隅に執着する。あきらかに餌箱が緑色であることには気がつかないのである。チンパンジーは、餌箱の原位置という空間的な枠づけにしばられて、その枠をこえられない。「緑」という抽象的な概念を形成することができないからである。ここに、動物がことばを持たないための悲しみがあ⁽¹²⁾る。」

これはシンボル行動の芽生えである動物の延期反応の限界を示す例であるが、“symbol of symbol”である人間のことばとの相違をよく表わしている。

もう一つは、モルヒネの慣用と嗜癖の例であるが、これは人間が、ことばを持つ悲しさをあらわしており前の例とくらべて大変面白い。

〔2〕チンパンジーにモルヒネを定期的に注射すると、人間のモルヒネ「嗜癖」に似た行動が起こり、モルヒネが切れると、動物は檻から出て注射室へ行きたがりあばれ檻を出されると注射室の方へ実験者を引っ張り、もしそれがこぼれると狂暴になる。注射室へはいるとすぐ注射を受ける所へ行き、しずかに注射を受ける姿勢をとる。16—18時間食物も与えず注射もせずにおく。その後で食物と注射器のいずれかを選ばせると、注射器を選ぶ。ときには、その注射器を実験者の手の中へおくことさえする。これはチンパンジーのモルヒネ「嗜癖」の状態であるが、人間のモルヒネ嗜癖では、モルヒネの切れたときだけではなく、不断に注射を要求する。人間の場合、薬の切れた時だけそれを要求するのは、正しくは慣用とよぶ。この慣用と嗜癖のちがいは、ことばによるシンボル過程による。慣用者は、モルヒネという

薬名を知らないし、いま注射されている薬が嗜癖になる恐れがあるという事実も知らされていないから、薬が切れた時にだけあらわれる生理的・心理的な禁断症状という一時的なシンボルに左右されてはじめてモルヒネを要求する。子どもの精神薄弱児、精神病者に嗜癖がみられないのも、このためであるといわれる。これに反して嗜癖では、「モルヒネ」という薬品の名とそれに関する嗜癖の事実が一時的にではなく、永続的にシンボルとしていつも頭をはなれず、日夜寝食を忘れて「モルヒネ」を追い求めさせるのである。⁽¹³⁾

「ことば」を対象として、その種々相を研究する時、どの相を如何に取扱うかによって、諸科学は分立するのであるが、ここでは、言語の記号化という問題について、主として、心理学、哲学、論理学等の考え方や実験例から助けをかりて考えてみた。言語学だけでは明らかにされ難い事柄も、観点を定めることによって一層明らかにされることがあるからである。

Notes :

- (1) Webster's New World Dictionary (1-1)
Webster's Third New International Dictionary (1-2)
 - (2) 沢田允茂：「現代論理学入門」(pp. 35~36)
 - (3) Colin Cherry: *On Human Communication*
 - (4) Chales Morris: *Signs, Language and Behavior*
 - (5) Roman Jakobson: "Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances"
Fundamentals of Language (pp. 58-82)
 - (6) Ibid. p. 66
 - (7) Webster's Third New International Dictionary
 - (8) Ibid.
 - (9) Jakobson: Ibid. (p. 67)
 - (10) Ibid. (p. 68)
 - (11) L. Hjelmslev: *Prolegomena to a Theory of Language*
 - (12) 南博：「体系社会心理学」(pp. 243~244)
 - (13) 同書 (pp. 244~245)
- その他 波多野完治：「ことばと文章の心理学」
Gardener, Lindzey (ed.) : *Handbook of Social Psychology* Vol. II. Chapter 19 "Psycholinguistics."